

# 8章 児童中心の新教育思想 —デューイの経験主義教育論—



## 1 新教育運動の起源

伝統的な旧教育を批判して生まれた「新教育運動」(New Education Movement)は、19世紀末から今世紀初頭にかけて多様な教育改革運動を展開した。この運動は、教育の革新を求める新しい理論や提言だけなく、新学校や実験学校と呼ばれる新しい教育実践の試みもおこなわれた。そして、この運動は欧米諸国を中心としながら、日本、中国、インドなどのアジア各国へ広がり、国際的な教育改革運動へと発展した。

当時の欧米諸国は、19世紀後半から初等教育の義務化をはかり、教育の機会均等を保障する国民教育制度を確立しつつあった。しかし、実際の教育体制は旧態依然とし、伝統的な暗記・暗誦による注入主義的な教授方法がおこなわれていた。そこでは無味乾燥な教科書が使用され、子どもの人格や個性はまったく無視された。新教育運動は、こうした伝統的な教育の在り方を批判し、代わって子どもの興味・関心や自発性を尊重し、子ども自身による作業や活動を強調した。

新教育運動は、基本的にはルソー (Rousseau, J.-J. 1712~78) 以来の子どもを一個の人間としてみとめ、子どもの成長・発達や個性を尊重する教育理論の継承・発展であった。この運動の特色として、児童中心主義、全人主義、活動主義、労作主義、生活中心主義などを挙げることができる。

## 1 児童の生活経験の重視

デューイの著書『学校と社会』は、シカゴ大学付属小学校における13年間の教育実践報告として刊行され、教育思想家として彼の名を一躍有名にした。デューイは、この付属小学校を「実験学校」(Laboratory School) と呼び、教育理論を実際の教育活動のなかで検証した。冒頭でも紹介したように、同書のなかでデューイは「子どもが中心となり、その周りに教育についての装置が組織される」と述べて、新しい教育は児童が中心になることを高らかに宣言している。

デューイによれば、アメリカの伝統的な学校は子どもの生活経験をまったく無視し、教師中心、教科書中心による暗記・暗誦の教育方法が横行していた。

それは、子どもの本能、興味、活動、能力などとは無関係な教育であり、学校の生活からの孤立や社会からの孤立をもたらすものであった。デューイからすれば、学校とは、子どもにとって今を犠牲にして将来に備える場所でもなければ、抽象的で非現実的な事柄を学ぶ場所でもなかった。学校とは、子どもにとって生活と密接に結合し、生活を通して現実社会を学ぶ場所でもあった。デューイは、こうした学校を「小型の共同社会、胎芽的な社会 (a miniature community, an embryonic society)」(デューイ, 1998: 77) と呼んでいる。

デューイが考える学校とは、子どもの興味を尊重した活動的な社会生活を営む

密接に結合した、一つの有機的な全体として位置づけたのである。

デューイは、なぜ学校教育において、子どもたちの直接的、間接的な経験を重視したのであろうか。じつは、デューイの教育思想の根本は人間の生命、生活、一生を成長の過程ととらえることにあった。したがって、教育は子ども自身の経験を不斷に反省し、連続的に更新することが重要であった。生命は発展であり、成長・発展が生命であった。デューイにおける教育の過程とは、未発達な存在としての子どもと人類の経験に具現化された社会的な価値の相互作用として進行するものであった。



イヴァン・イリッヂ著／東洋・小澤周三訳  
1977年

## 脱学校の社会

東京創元社

高旗正人  
著者名

イリッヂについて  
一九七〇年代から八〇年代にかけて、イヴァン・イリッヂは、衝撃的な教育論者として話題になった。平成二九年に発行された最新版を見る限りで四〇版である。昭和五二年（一九七七年）に初版、平成二九年（一九七七年）まで四〇年間、版を重ねた本書は、名著と言えるであろう。子どもや教育や社会、学校について考える人々が各自の課題に応じて多くの示唆を得たにちがいない。そのような書物を編むイリッヂとはいかなる人物であろうか。

彼は一九二六年オーストリアのウィーンで生まれ、

移り、クエルバーカに国際文化資料センターを立ち上げた。この活動からイリッヂは、公教育に関する独自の考え方を形成していった。

### 脱学校論の教育観

#### (1) 学習指導要領の改訂

昭和三三～三五年改訂「基礎学力の充実」、昭和四三～四五五年改訂「教育内容の一層の向上」と教育内容が量的に増え学習困難になると、校内暴力、落らこばれ、不登校など、子どもたちからの直接間接的学校批判も増え、学校の教育機能は低下していった。そのような中で、一九七六年中央教育審議会は学習内容を削減し、「ゆとりある充実した学校生活の実現」を提言する。一九七七年（昭和五二年）答申に基づいた小中学校の学習指導要領の告示が出された。学習内容が前回より下向する改訂が行われた。それは、当時の歴史的な転換と教育現場からは好意的に迎えられた。一連の問題意識から、大学の入試問題の検討も行われた。本書「あとがき」によると筆頭訳者、東洋教授は、当時、東京大学入試制度検討委員の任に当たっておられた。

義務教育制度をはじめ学校制度が確立した社会では、

テレビ番組に出演された際に「入学試験をくじ引きにしたら良い」との発言があり、私は、解せない気持ちでいた。今にして思えば、イリッヂの脱学校論と無関係ではなかったのである。

#### (2) 学校制度の潜在カリキュラム

イリッヂの脱学校論は一つの社会革命論としてみることができる。学校教育制度が現代社会に存在する」とによって生じる問題を洗い出し、学校を前提としたい教育体制を備えた理想的な社会を描こうとしたのが本書である。

間を得るためのネットワークの準備)、④広い意味での教育者のための参考業務(教育のサービス提供者の専門分野、住所氏名の登録)をあげ、学校のない社会での学習を実施する観点を詳しく考察説明している。

しかし、学校なしで、基礎・基本の学習はいつどこでやるのか。子どもたちは、イリッヂが考へるよろしく、学習への興味や関心が強く、学習への自主性、自発性に富んでいるだろうか。また、社会の一層の発展のために求められる高度な自然科学や人文・社会科学の研究力などは高等教育機關なしに継承できるのであろうか。不安が残る。

#### (1) 参考文献

- (1) イヴァン・イリッヂ著、東洋・小澤周三訳『脱学校論の社会』東京創元社、平成二九年(初版昭和五二年)
- (2) イバン・イリッヂ著、滝本往人訳『解題』
- (3) 大倉健太郎『脱学校論のいま――学校教育の可能性と制約』武内清編『子どもと学校』子ども社会シリーズ3、学文社、二〇一〇、一五一、一六二頁

ここで視点を変えてみよう。わが国の教育の現状は、学校教育と学校外教育とで展開されている。学校外教育が長すぎるとか短すぎるとか、カリキュラムがよくないとか、指導法の変更を求めるとか、教材に問題があるとか、授業時間が長すぎるとか短すぎるとかの問題ではない。むしろ世の中に学校教育制度が存在することと自分が問題なのである。イリッヂは現代社会における学校制度の潜在的カリキュラムを分析して、脱学校化は、人間を生かす社会にとつて回避できない課題であるとする。

新教育運動は、時代を超えて、教育や教育制度に対する子どもの視点からの改革運動であったといえるであろう。新教育運動の流れは、立脚点によって二つに分けることができる。一方は、教育制度や学校の存在を前提とした改革、他方は、学校教育制度の存在自体を否定する教育。イリッヂは学校を廃止したあと学校に代わる教育、は後者の立場に立つて、子どもたちの感性、自発性、主体性の育成と社会・文化の変革をねらう教育改革である。イリッヂは学校を廃止したあと学校に代わる教育、が可能である。一方は、教育制度や学校の存在を前提とした改革、他方は、学校教育制度の存在自体を否定する教育である。このように考えて、国は多種多様な学校をつくり、国家予算をつぎ込むことになる。他方では進学競争が生まれ、競争意識を子どもたちの心に植え付け、ひいては、勝ち組と負け組を生み、結果的には子どもたちの将来に貧富の差ができることを正当化してしまう。

義務教育が発達し、九年間ないしは二年間という長い間、同学年の児童・生徒が全員学校教育を受ける学した者は、卒業した者に対する劣等感を抱いたり、次への教育段階へ進めないなどのハンディキャップを持つ。学校教育制度は、社会にあやまつた学習観と劣等感と優越感を生み、人ととの関係を分裂に導く。だから学校教育制度は廃止しなければならない。そして、

学習のために、用意すべき四つの視点として、①教育施設、体制のさらなる充実発展に取り組まねばならないであろう。このように考えると、本書は、子どもたちの学習への興味や関心が強く、学習への自主性、自発性に富んでいるだろうか。また、社会の一層の発展のために求められる高度な自然科学や人文・社会科学の研究力などは高等教育機關なしに継承できるのであろうか。不安が残る。

ここで視点を変えてみよう。わが国の教育の現状は、学校教育と学校外教育とで展開されている。学校外教育が長すぎるとか短すぎるとか、カリキュラムがよくないとか、指導法の変更を求めるとか、教材に問題があるとか、授業時間が長すぎるとか短すぎるとかの問題ではない。むしろ世の中に学校教育制度が存在することと自分が問題なのである。イリッヂは現代社会における学校制度の潜在的カリキュラムを分析して、脱学校化は、人間を生かす社会にとつて回避できない課題であるとする。

新教育運動と脱学校論

学校のない社会で学習し、自らの知識・技能・概念・態度などを身につければならないとイリッヂは考える。